

“農”のある  
まちづくり

## コテージむら (公社)岩手県農業公社

新しい形の“農”ある暮らし  
シェアビレッジ構想で  
多世代が一つの村に共存

都心部への人口集中が進む一方で、地方への移住への関心が高まっている。地方移住の一つのキーワードが「農」である。

農林水産省は、次世代を担う農業後継者が農山漁村で魅力的なライフスタイルを実現するための「農家住宅」を提唱、平成29～30年度に農家住宅に関する地域の構想づくりを進めた。国土交通省、都市再生機構などと「農家住宅実践支援チーム」を設置、モデル地区を選定して農家住宅の取り組みを支援するというものである。

そのモデル地区の一つに選定されたのが(公社)岩手県農業公社が分譲する「コテージむら」(岩手県岩手郡雫石町)である。

### 63haに宅地付き農地 39区画の農家住宅

「コテージむら」は全約63haの開発地に、宅地付き農地39区画を分譲するもの。平成4年から分譲を開始し、これまでに13区画が販売済みだ。また、「第2コテージ」と呼ばれる区画はすでに14区画が完売しており、現在、全体で27世帯が暮らすまちとなっている。

宅地+農地のセットであることが一番の特徴。広くても4反程度に分譲地であり、専業農家を営むだけの広さはなく、リタイアした人の移住、また、週末をここで暮らすセカンドハウスの需要がメインで、居住者は年配の



約63haに39区画の農家住宅のまちづくりが進む

DATA 場所:岩手県岩手郡雫石町  
広さ:約63ヘクタール  
戸数:39区画

層が多い。

コテージ村の管理センターは住民に開放されており、楽器演奏や朗読会など趣味の場として、また、芋煮会など住民のコミュニケーションの場として活用されている。町民に開放された町有の体験農園が隣接し、コテージむらの住民も農機具などを活用して様々な野菜を作っている。また、加工施設には食パンをつくる工房などもあり、興味のある人が集まって出荷までを行っている。未購入の土地、借り手がない農地は公社が牧草を育てる。

この岩手山をのぞむ広々としたまちで、「農

家住宅」という新たなまちづくりが進められた。

## 2つのモデルプランを提示 シェアで共存する構想

平成29年度、NPO法人しずくいし・いきいき暮らしネットワーク、岩手県、雫石町、(公社)岩手県農業公社などが集まり「コテージむら農家住宅推進協議会」が設立、農家住宅のモデル地区として、これまでの農家の「家」のイメージを覆すような新しい農家住宅を再定義することで、新規就農者の移住の促進を目指した。

「コテージむら」は、もともとリタイアメントハウスやセカンドハウスの見込んでいたが、住民の高齢化が進んでいることなどもあり、プラスアルファの価値を生み出そうという試みである。

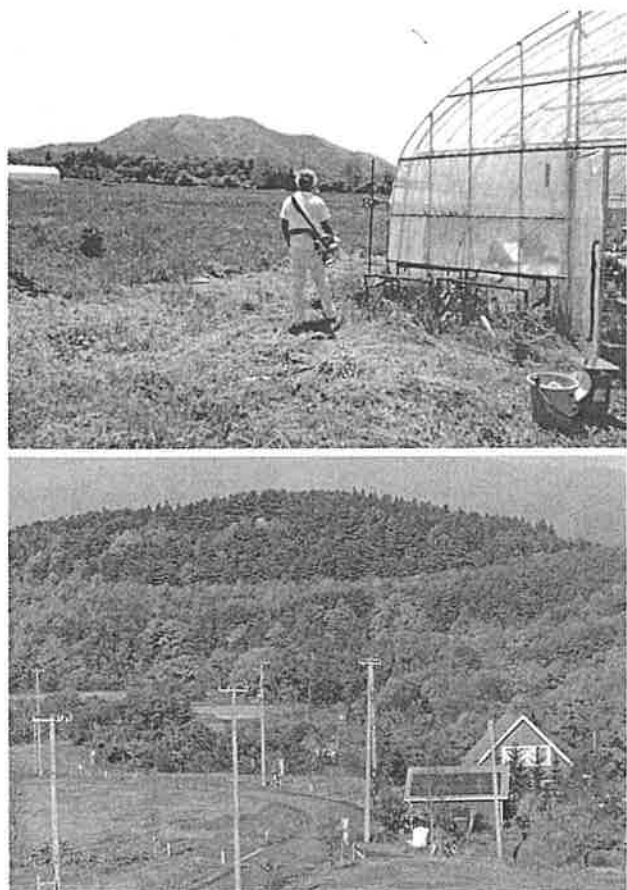
具体的には「シンブルプラン」と「がつつりプラン」という2つ



移住、週末暮らしなどさまざまな「農ある暮らし」が広がる

のモデルプランを提示、その2つの農家住宅が「シェア」の考え方のもとに一つの村として共存する「シェアビレッジ構想」を打ち出した。

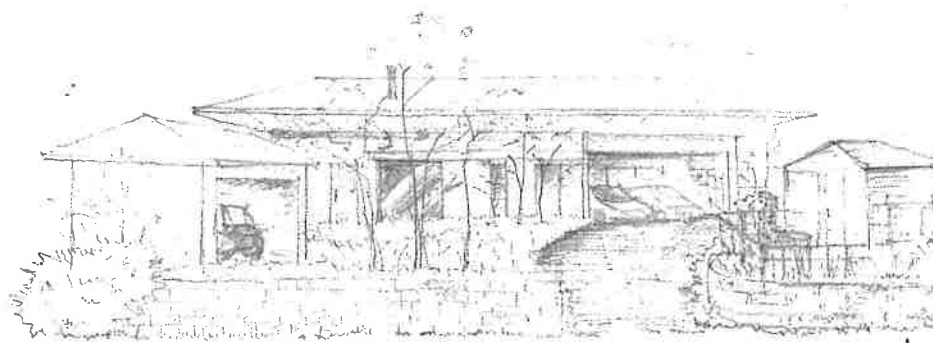
「シンブル農家住宅」は、若年層に向けた初期費用が安いタイニーハウス。コンパクトでシンブルな農家住宅とすることで、兼業・副業農家暮らしを気軽に始めることができる。都市に暮らし週末に農業を楽しむために訪れる、セカンドハウスとして活用するといった層をイメージする。「がつつりプラン」は、定年退職者向けを想定した古民家を移築するようなイメージ。薪ストーブや土間、蔵の機能を受け継ぎながらも、高断熱仕様とすること



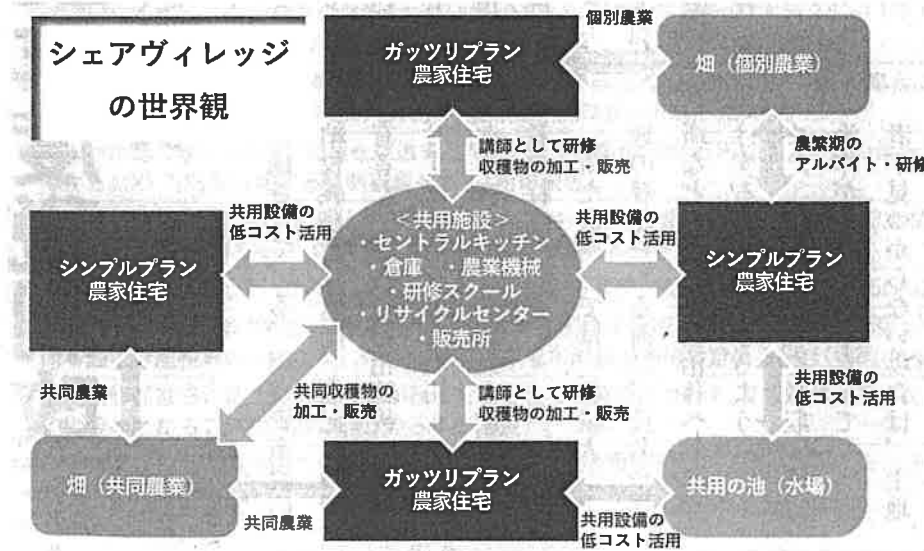
# 暮らしに価値を 2020年代のまちづくりの“鍵”



無理なく農業を始められるコンパクトな「シンプルプラン」



日本一暖かい農家住宅「がっつりプラン」



シェアの考えで共存を目指す「シェアビレッジ構想」

で、日本一暖かな農家住宅を目指す。まちなかで中核的な役割を果たす専業農家を想定している。

「シェアビレッジ構想」は、まちなかにセントラルキッチンや倉庫、農業機械などを置き、住民がそれをシェアできるようにするもの。これにより農業を始めるための初期コス

トを抑え、若年層などの参入障壁の打開につなげる。また、農繁期には「がっつりプラン」の住民に対し、「シンプルプラン」に暮らす兼業住民が短期就農や手伝いをするなどとも考えられる。

「専業で農業を営む中核農家があり、その周りの兼業農家と互いに協力しあいながら、そ

れぞれ農業を楽しんで暮らす」（公社）岩手県農業公社総務部・中澤英世副部長）というまちづくりの構想だ。

## 多様なライフスタイルが集まり まちづくりが進む

「シェアビレッジ構想」は、まだ道半ば。現在、コテージむらに暮らす住民の多くが早期退職をして移住した人が多く、農業で生計を立てている人は少ない。趣味や余暇として、農のある暮らしを楽しんでいる世帯だ。

今後、中核となる専業農家として移住する世帯が出てきて、初めてこの構想が動き出す。若年層とリタイアメント世代、兼業農家と専業農家、完全移住と週末移住——さまざまな形で「農」に携わる人が集った時、新しい「農」のあるまちづくりが形となる。